

令和5年度 専攻科学生選抜学力試験問題用紙 専門科目 ②基礎会計学

I. 次の磐前株式会社の＜資料1＞，＜資料2＞をもとに解答用紙の貸借対照表と損益計算書を完成させなさい。なお，会計期間は2020年4月1日から2021年3月31日の1年とする。

＜資料1＞

決算整理前残高試算表（単位：円）

借方	勘定科目	貸方
820,000	現金預金	
75,000	受取手形	
610,000	売掛金	
1,040,000	繰越商品	
25,200	前払費用	
4,000	仮払法人税等	
	貸倒引当金	8,000
1,200,000	建物	
640,000	備品	
	建物減価償却累計額	558,000
	備品減価償却累計額	436,000
800,000	土地	
120,000	特許権	
48,000	長期前払費用	
	借入金	1,600,000
	支払手形	260,000
	買掛金	500,200
	未払金	220,000
	未払費用	150,000
	仮受金	2,000
	賞与引当金	150,000
	資本金	1,000,000
	資本準備金	116,000
	利益準備金	101,000
	繰越利益剰余金	520,000
	売上	10,400,000
	受取利息	20,000
8,400,000	仕入	
1,600,000	給料手当	
150,000	旅費交通費	
100,000	水道光熱費	
80,000	通信費	
32,000	保険料	
99,000	減価償却費	
150,000	賞与引当金繰入	
48,000	支払利息	
16,041,200		16,041,200

＜資料2＞ 期末整理事項（未処理事項を含む）

1. 前期において発生した売掛金¥5,000の貸倒処理が未処理のままであった。
2. 受取利息¥2,000が仮受金に計上されたままになっていた。
3. 通信費¥7,500の銀行自動引落としが未処理のままとなっていた。
4. すでに代金を現金で受領していた商品の売上（売価¥6,000、原価¥4,900）が3月31日までに出荷されていなかったことが判明したが、売上取消し処理が未処理のままとなっていた。
5. 受取手形および売掛金の残高について、1%の貸倒引当金を差額補充法により設定する。
6. 商品の期末帳簿棚卸高は¥940,000、実地棚卸高は¥946,000であった。棚卸差異の原因を調査したところ、①3月30日に納入された商品¥8,500の掛仕入が帳簿上で計上漏れしていたこと、②上述4.の商品は帳簿棚卸高と実地棚卸高のいずれにも含まれていないことが判明した。
7. 未払費用の残高は前期末の決算整理により計上されたものであり、期首の再振替仕訳は行われていない。期首の未払費用の内訳は給料¥140,000および水道光熱費¥10,000であり、当期末の未払額は給料¥143,000および水道光熱費¥12,000であった。
8. 長期前払費用の残高は、2021年3月1日に2年分の火災保険料を支払ったものである。当期分を月割りで費用に計上するとともに、1年以内に費用化される部分の金額を前払費用に振り替えることにした。
9. 有形固定資産の減価償却を次のとおり行う。
建物：定額法，耐用年数30年，残存価額ゼロ
備品：200%定率法，耐用年数8年
注1：建物の取得原価のうち¥150,000は2020年10月1日に取得し使用開始したもの（減価償却は月割り）であるが、これ以外の有形固定資産は期首以前から所有している。
注2：減価償却費は、概算で建物は¥3,000、備品¥6,000を4月から2月まで（11カ月間）は月次決算で計上してきているが、減価償却費の年間確定額との差額を決算月で計上する。
10. 借入金は、2021年2月1日に借り入れたものであり、その内訳は次の通りである。
残高¥600,000：返済期日、2022年1月31日，利率2.4%
残高¥1,000,000：返済期日、2024年1月31日，利率3.6%
利息は2月1日と8月1日に6カ月分を前払いすることとし、支払時に全額を前払費用に計上しているが、期末に当期の利息分を月割りで計算して計上する。
11. 特許権は、2016年4月1日に取得したものであり、定額法により10年間で償却を行っている。
12. 賞与引当金は、年2回の賞与の支給に備えて2020年10月から2021年2月まで、毎月¥30,000を計上してきたが、期末に支給見積額が¥200,000となり追加計上を行う。
13. 決算整理前残高試算表に計上されている仮払法人税等は、受取利息の源泉所得税であり、当期は未収還付法人税等を含めて表示する。

令和5年度 専攻科学生選抜学力試験問題用紙 専門科目 ②基礎会計学

Ⅱ. 当工場では、実際工程別総合原価計算を実施している。次の〈資料〉にもとづき、工程別の仕掛品勘定の（ ）内に適切な金額を記入しなさい。なお、月末仕掛品の評価は、第1工程では、平均法、第2工程では、先入先出法により行っている。

〈資料〉

1. 生産データ

	第1工程	第2工程	単位：kg
月初仕掛品	150 (60%)	100 (70%)	
当月投入	<u>850</u>	<u>750</u>	
合計	<u>1,000</u>	<u>850</u>	
月末仕掛品	150 (80%)	150 (80%)	
正常減損	100 (50%)	—	
完成品	<u>750</u>	<u>700</u>	
合計	<u>1,000</u>	<u>850</u>	

注1：原料はすべて第1工程の始点で投入される。

注2：（ ）内の数値は加工進捗度または正常減損の発生点を示している。

2. 原価データ

	第1工程	第2工程		第1工程	第2工程
月初仕掛品			当月投入		
原料費	72,000 円	—	原料費	378,000 円	—
前工程費	—	125,000 円	前工程費	—	?? 円
加工費	63,900 円	112,000 円	加工費	562,500 円	1,185,000 円

3. その他

正常減損の処理は、度外視法による。正常減損費は、正常減損の発生点と月末仕掛品の加工進捗度を比較し、適切に良品へ負担させる。

令和 5 年度 専攻科学生選抜学力試験問題用紙 専門科目 ②基礎会計学

Ⅲ. ①次の資料 1 の取引にもとづき、現金主義会計と発生主義会計の相違を、数値例を用いて説明しなさい。なお、発生主義会計が採用される 3 つの理由についても説明すること。

※数値例を示す際、必要に応じて解答用紙の罫線を無視してもよい。

資料 1：商品を現金 400 万円で仕入れた。

そのうち、200 万円分の商品を 300 万円で掛売した。

②発生主義会計を機能させるために『企業会計原則』へ組み込まれている 4 つの原則（または主義）がある。それぞれについて説明しなさい。